

平成29年度研修旅行

「秋の箱根・熱海・小田原

名建築と美術館をめぐる旅」

大自然の美しさとアート・歴史的建物を堪能

信州名匠会の平成29年度研修旅行は、10月14日・15日に20名が参加して行われ、箱根・熱海を巡った。

初日午前中、内藤廣氏が設計した「とらや工房」と、敷地に隣接している「東山旧岸邸」を見学。午後一番、神山荘や苔庭など四季折々の風景が楽しめる「箱根美術館」を見学し、その後、「箱根ケーブル」と「箱根ロープウェイ」を使い「大涌谷」へ行き、各々くらたまごなどを食べ楽しんだ。

2日目は、日本の伝統的な建築様式と外国の様式が融合された洋館、緑豊かな庭園がある「起雲閣」を見学した。現代美術家の杉本博司氏と神田倫之氏と共に主宰する「新素材研究所」がリニューアル計画を手掛け、昨年2月にリニュー

アルオープンした「MOA美術館」を鑑賞した。昼食は、降旗廣信先生が再生された鈴廣かまぼこの里の「千世倭樓」で美味しい食事を堪能した。歴史的建物を多く見学できる研修旅行であったと共にそれぞれの建物の構造や意匠性を強く感じる事ができた。



旧岸邸にて

屋内から園庭を味わう旧岸邸の美しさ

1日目に訪れた「東山旧岸邸」は、首相を務めた岸信介の自邸として1969年に建てられた。

設計は、建築家の吉田五十八氏が行い、伝統的な数寄屋建築の美と、現代的な住まい機能の両立を目指して設計された。食堂は、園庭を眺めながら食事を楽しむことができるようにサッシがフルオープンとなる押込戸となっており、さながら1枚の絵画となっていた。四季を楽しむ工夫が施されていた。和室は数寄屋建築を取入れ床の間や付書院を備えており、中庭を見ながらゆったりした時間を過ごす空間となっていた。

居間に置かれたソファが非常に柔らかく、皆さんがはしゃいでいたことを思い出す。庭に向かって置かれたソファは、岸氏が庭を眺めるのが好きだった様子を表していた。

旧岸邸
居間から庭を望む旧岸邸
食堂のピクチャーウィンドウを望む

研修旅行スナップ

2日目の「起雲閣」。日本の伝統的な建築様式が残る本館では、壁の色が青や紫、茶色など部屋によって様々な色合いがあり、付書院は組子を割り竹で作っていて竹の節を模様のように取り入れている。また豊廊下のガラスには「大正ガラス」が使われており、職人が1枚1枚流し込んで作っていたとのこと。

外国の様式が融合された洋館には、日本、中国、欧州などの装飾と様式が用いられ、独特の雰囲気漂う空間であった。館内の随所に施されていたステンドグラスやタイルなどの装飾や家具が、より一層、別の国に来たかと思わせるような魅力のある雰囲気を醸し出していた。



箱根美術館 苔庭にて



とらや工房を見学



MOA美術館
館内へのアプローチ空間



鈴廣かまぼこの里にて昼食

研修旅行日程

10月14日(土) 山二ハウジング駐車場-中央道・河口湖-東富士五湖道路-とらや工房・東山旧岸邸-カフェレストラン旬幸(昼食)-箱根美術館-公園上駅・箱根登山ケーブル-早雲山駅-箱根ロープウェイ-大涌谷駅-真鶴「鯛納旅館」(泊)

10月15日(日) 真鶴-起雲閣-MOA美術館-鈴廣かまぼこの里(見学と昼食、お買物)-三島-伊豆縦貫道-新東名高速-駿河湾沼津SA(お土産のお買物)-朝霧高原-甲府-中央道-山二ハウジング駐車場

平成29年度研修旅行「秋の箱根・熱海・小田原 名建築と美術館をめぐる旅」参加者名簿

(20名。氏名・所属。順不同、敬称略)

坂田守夫・坂田工業(株)、中沢智・中沢康敏・(有)中沢建具店、西宮武久・(株)綿内瓦工業、犬飼栄治・(株)シナノ大理石、黒澤忠・クロサワメタル(株)、増田幸雄・匠建設(株)、五明良平・(株)五明、堀誠・建築工房アカシア、鎌倉良収・(株)鎌倉木材、轟貢・(株)鎌倉木材、小坂浩一・小坂建設(株)、大内健太郎・サンコー特機(株)、川上恵一・(有)かわかみ建築設計室、宮尾智也・(株)さつき苑、倉橋美有希・(株)倉橋建築計画事務所、赤塩和広・(株)降幡建築設計事務所、宮本夏樹・(株)宮本忠長建築設計、江口大輝・中村研哉・事務局

会員の動向 (平成30年1月~平成30年5月。順不同、敬称略)

- 担当者の変更 賛助会員 ■ (株)角藤 前任)田中 謙一 新任)齋藤 昌彦
(株)LIXIL長野営業所 前任)隈部 岳雄 新任)前川 直樹
(株)トリアン 大庭 修→松岡 幹生
- 退会 個人会員 ■ 久保 是彦・(株)第一ネームプレート

会員に聞く
「たぐみの仕事」 Vol.27

未来の職人が 感心するものを残したい

株式会社宮内 代表取締役 宮内計臣(かずおみ)氏 (千曲市鋳物師屋)

profile●1969年(昭和44年)2月24日生まれ、49歳。千曲市出身。社員は10人。息子と娘が1人。



「理想通りにいかないことが多く、ずっと突き詰められるところが面白い」と左官の魅力語る。職人としては、細かいところまでの工夫やオリジナリティーを常に追求している。「試行錯誤しながら理想通りにいくことを目指している。苦勞することは多いが、思い通りにいったときのやりがいは大きい」。最近では「左官の手仕事の魅力を感じてもらえるようになったのか、施主から『宮内さんにお任せします』と言われることもある」と笑顔を見せる。

今後、力を入れていくのは、古民家や文化財の修復だ。「いまあるものを次世代に残していきたい」という。これまでは、長野市松代の寺町商家や千曲市八幡の松田館などの文化財の整備に関わってきた。「100年後の左官職人が見たときに、感心してもらえるようなものを残したい。その建物の壁や土蔵を見て、昔の職人はすごいと思ってもらえれば」と思いを語る。

(株)宮内は昭和47年の創業。今年で創業46年目を迎える。先代の父親が地元の左官屋から独立、10年前に計臣氏が2代目として事業を

受け継いだ。「苦しい時期も多かったが、続けてこれたのはまわりのおかげ。自分は本当に恵まれていた」と、この10年間を振り返る。今、社内には20代の若手社員が2名在籍している。「会社として北信能力開発センター(中野市)の左官科に派遣したこの二人の職人が、働きながら通って、無事に終了した。良くがんばったと思う。技と心意気を若手に引き継いで、一人前に育てたい」。職人の世界は思い通りにいかないことがあり、若手は苦勞することが多いというが、将来的には「独立できるまでに育てあげる」ことが目標だ。

自社だけでなく、業界の将来を見据え、地域のイベントにも参加。左官の体験コーナーを開き、「『左官』という言葉を一般に知ってもらう機会になれば」と期待を寄せる。

「支えてくれた従業員、お付き合いしていただいた企業みなさんに感謝して、その期待に応えられるような仕事をしていきたい。それが恩返しになる」



総務・経理の全般を担う輝美(てるみ)夫人と。

会員に聞く
「たくみの仕事」 Vol.28

既成概念にとらわれず、常に精度や効率のより良い技法を求める

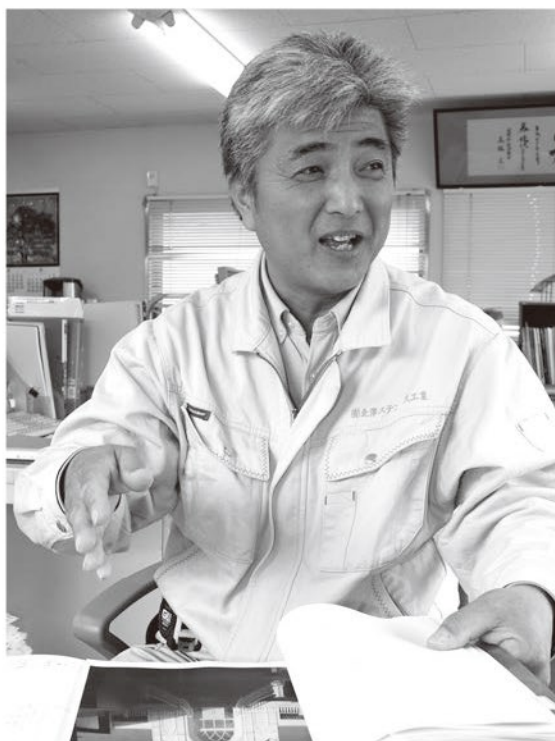
有限会社北澤ステンレス工業 代表取締役社長 北澤 徹 氏 (長野市川中島原)

profile●1968年(昭和43年)10月8日生まれ、49歳。長野市川中島出身。家族構成は母、妻、長女(高1)、次女(小6)。

「専門的な知識と技術で、特殊性のあるものづくり」と自身の事業を表現する。「ステンレスの特性を最大限に生かし、公共施設やビル建築、商業施設まで、人々に長く使われる製品をつくり出すことが、この仕事の魅力」と語る。職人としては「既成概念にとらわれず、常に精度や効率のより良い技法を考える」のがモットー。「難しいことに挑戦するのは、自社の技術力を高めるためになる」といい、印象に残った作品に、長楽寺の唐傘風金物、手すり、安全柵(すべてOMZP加工)などをあげる。

中央工学校で建築を学び、千広建設(長野市)に入社。5年間の現場代理人の経験を積んだ後、2代目として事業を継ぐために、北澤ステンレス工業へ。2012年に社長に就任して7年目、来年で創業40周年を迎える。先代の父親が事業の展開を見据えていたことから、中央工学校への進学を勧められた。「先代はステンレスを専門とする本当の職人だったので、自分には『図面を書けるようになってほしい』と言っていた」と振り返り、「いろいろあったけど、先代が望んだ道を歩んでこられたのかな」と笑う。

名匠会に加入して5年が経つ。「研修会からは学ぶことがたくさんあり、仕事への刺激をもらっている」と話す。会員とともに仕事をするに対しては「(名匠会の)先生方は良かったところを具体的にあげてくれる。それがモチベーションになっている」。



施工実績を振り返りながら、「技術力の一層の向上と若手の育成を進めていく」と覚悟を語る。



工場でベテラン職人が繊細な曲げ加工を施したステンレス材を前に。

職人の働きやすさと人材の育成

「昨年に社員の給料形態を見直した。社員の収入の安定化と休日の確保が狙い」。職人も働き方改革を考える時代になっていることに加え、若い人材の確保のための改革だ。「職人の働き方も今の時代にそぐわなくなっている」といい「社員の多くは40代で、家庭もある。模索しながらだが、社員のためを思っている」

これから先の5年間は、20～30代の人材確保に力を入れることが目標。金属を扱う特殊な仕事であるため「一人前になるには10年間かかる」というが、「現場に若い人を入れて育てないと会社の力が落ちていく」と将来を見据えている。

業界の未来のため、2年前から地元の中学生の職場体験にも協力する。「若い世代にもものづくりの楽しさを知ってもらいたい」とし「将来的にこの業界に興味を持って、目指してもらえれば。『10年前に北澤ステンレスで体験学習しました』とか言われると最高ですね」と笑顔を見せた。

定例研修会●Report

(平成29年12月～平成30年4月)

平成29年度 第4回研修会 信州名匠会リレートーク VOL.17 【トイレの話】

平成29年12月19日(火)

会場：宮本忠長建築設計事務所

プレゼンター：(株)LIXIL 百瀬 和巳氏

(株)LIXIL 魚住 浩司氏

参加者：24名

トイレを空間として捉える

LIXIL(東京都)の百瀬和巳氏と魚住浩司氏を講師に迎え、トイレにまつわる話を聞いた。百瀬氏によれば「女性はトイレを空間として捉えている」という。女性はデザインや掃除のしやすさを重視する傾向があるため、リフォームでは機能重視だけでなく「見た目を大きく変えることと、使いやすさを向上させることが重要」とした。また、同氏は今後日本の少子高齢化が進行していくことに触れ「トイレは一日に複数回利用する場所なので、ユニバーサルデザインの配慮をしていく必要がある」とし「一つ一つの動作がスムーズに行えるようにすることが大切になってくる」と話した。

百瀬氏は日本に洋式水洗便器が普及するまでの経緯についても紹介。「明治以降、文化の欧米化が進み、建築に洋風の様式が取り入れられた」といい、1880～90年代に腰かけ式の洋風便器がつくられ、水洗式の便器が輸入されたと話した。高度経済成長期の人口増加を背景に、日本住宅公団が発足。洋風水洗便器は、同公団で採用されたために急速に普及したという。同氏は「トイレは用を足すための衛生陶器から、洗浄機能を持ち、快適機能を追加して進化してきた」とトイレの歴史を説明した。

日々利用しているトイレに関して、トイレの歴史や普及率など普段知りえないことまで学んだリレートークとなった。



平成29年度【新年会】

平成30年1月17日(水)

会場：ホテル犀北館

参加者 40名

過去を悟って、未来につなげる

信州名匠会の新年会が1月17日、犀北館で開催。40人が出席し、会員同士の親睦を深め、2018年の同会の活動スタートを祝った。

土本俊和会長は年頭のあいさつで、インドに行ったことを報告。「インドは昔から牛糞を土壁に使っているそうです。仕上げの漆喰のように、すさの混じった土壁のような感じがした」と話し「自然に親しむ優しい建築をインドに学びながら、自然に対する慈しみを大切に、後進への技術継承をし、そして高みを目指して努力していきましょう」と呼びかけた。

井内猛男副会長は、働き方改革について触れ「働き方改革の名の下で、時間で区切られるとどうになってしまうのか。若い人に仕事を任せてしまうと長時間労働になってしまう。なにより技術の継承はどうなるのか」と問題を提起し「この1年間は業界の展望と法制度への対応を考えていかなければならない」と今まで以上の会員同士の一致団結を促した。



平成29年度 第5回研修会 信州名匠会リレートーク VOL.18 【消防防災設備のいろは】

平成29年2月21日(水)

会場：宮本忠長建築設計事務所

プレゼンター：サンコー特機(株) 白石 大陸氏

能美防災(株) 伊藤 睦氏

参加者：30名

空気管式の施工は匠の技術が必要

○文化財に適した自火報を紹介

2018年初回となる研修会では、恒例の会員リレートークを実施した。講師はサンコー特機の白石大陸氏と能美防災の伊藤睦氏が務め、自動火災報知機や消防設備工事について説明した。

伊藤氏は、文化財に適した感知器として差動式分布型感知器(空気管式)と無線式の自動火災報知機を紹介。空気管式の感知器が文化庁の推薦であることに触れ「文化財に適している要因として、塗装して目立たないようにできるため、景観上優れている」と説明。しかしデメリットとして「施工がとても難しい」という点を挙げ、施工には名匠会の匠の技が必要とした。

同氏が文化財に推薦する感知器は無線式。「従来の感知器は配線工事が必要だが、無線式のもの不要」とメリットを述べ、無線を遮るものが少ない木造の文化財に特に適していると「施工性に優れた建物に優しい感知器」と解説した。実際に、伊藤氏と白石氏が無線式の自動火災報知システムのデモ

ンストレーションを披露した。

今回のテーマである自動火災報知機は、職人にとってはなじみのないものだが、日常生活では目にする機会が多い。そのため、一般教養としての勉強にもなるリレートークとなった。



伊藤氏（左）と白石氏が無線式のデモンストレーション

平成29年度 第6回研修会 信州名匠会リレートークVOL.19 【ストーブ・サウナあれこれ】

平成29年3月29日(水)

会場：宮本忠長建築設計事務所

プレゼンター：長野サウナ販売（株） 山本 耕平氏

：（株）メトス 岩崎 秀明氏

参加者：23名

○一番大切なことは「焚きつけ」

今回のプレゼンターは、長野サウナ販売の山本耕平氏と、メトスの岩崎秀明氏。「火(Hi)story」と題し、日本の火にまつわる文化、ストーブやサウナについて説明した。

岩崎氏は冒頭で「カマドでふっくらとしたご飯を炊き、囲炉裏で料理をし、家族全員で食事をする。ほんの数十年前までは火は身近な存在で、炎は生活の一部だった」と紹介。現代社会は、スイッチ一つで簡単に料理ができ、風呂も沸き、「火が家の中から遠ざかってしまっている」とした。そのため、同氏は初めて暖炉・薪ストーブを使う人に対して「焚きつけのしかたを説明することを大切にしている」と話し、焚きつけから楽しんでもらうことで「徐々に大きくなっていく炎を見ている



と、心にゆとりが生まれる」とした。

後半はサウナがテーマ。岩崎氏は、テントサウナ、イグルーサウナ、サウナトレーナーなど様々なサウナの種類を紹介した。

終盤の質疑では、針葉樹と広葉樹の燃え方の違いなどが話題に。岩崎氏は「針葉樹は高火力だが早く燃えてしまうため、敬遠されがち」「地域の土壌によって、同じ種類の薪でも燃え方が違う」「針葉樹と広葉樹は同じバランスで燃やすのが良い」などと詳細に回答し、リレートークを締めくくった。

平成29年度 第7回研修会 【松代象山地下壕・高義亭・ お花見・陶芸教室】

平成30年4月14日（土）

講師：（有）N設計 所長 西澤嘉雄氏

参加者21名

4月研修会は、長野市松代で見学会と親睦会を実施。松代象山地下壕や高義亭を見学したほか、松代城址で昼食を兼ねたお花見、午後は松代陶苑で陶芸教室を行った。

午前中に見学した松代象山地下壕は、第二次世界大戦末期に本土決戦最後の拠点として、大本営を移すために掘削された歴史的遺物。公開されているのは約500mだが、総延長は10km以上に及んでいる。この建設には、労働者として多くの人々が強制動員されたという経緯もあり、当時を考えさせられる見学会となった。



高義亭を見学する一行。

お昼は松代城の葉桜を見ながら、おにぎりとお団子をほおばった後に、恒例となっている松代陶苑での陶芸教室を体験。今回で数回目の陶芸体験という人から、初めて体験する人まで、それぞれが思い思いに作品をつくりあげた。職人がゆえに、作品へのこだわりが強く、一工夫されているものが多かった。焼き上がった作品は通常総会会場に展示される。



思いを形にしてゆく過程を楽しむ参加者。